

■（71）死亡記事を読む

2014. 2. 21

社会面や地域面の最下段には、よく「死亡記事」が掲載されます。多くは1段の小さな記事（ベタ記事）で、見出しはなく、亡くなった人の氏名の右側に傍線が引かれていることから「棒記事」と呼ぶ人もいます。おおまかにスタイルは決まっていて、氏名、ふりがな、肩書、死亡日、死因（病名）、年齢、通夜・葬儀の日取りと場所、喪主の名前、自宅住所が基本的な項目です。これに主な業績や経歴、小さな顔写真が加わる人や、簡単な見出しがつく人もいます。

死亡記事が載るのは、どのような人でしょうか。有名人や著名団体・組織の役職者、大学教授、国会議員などが多いようですが、市井の人で隠れたエピソードや業績を持つ人もいます。本人だけではなく、配偶者や親の死亡が報じられることもあります。1カ月間の紙面から、どのような人が死亡記事に載っていたか、子どもたちに調べさせるのもいいでしょう。

ところで、同じ死亡記事でも扱いの大きさに違いがあります。天皇や現職総理大臣は第1面トップ記事ですが、世界的に活躍した文化人や芸術家、国民から親しまれたスポーツ選手や芸能人も記事が第1面に掲載されることがあります。1998年に亡くなった映画監督の黒沢明さん、2009年の日本画家の平山郁夫さん、昨年では元横綱大鵬の納谷幸喜さん、プロ野球巨人元監督の川上哲治さん、歌手の島倉千代子さんなどが、朝日新聞東京本社発行版では第1面に載りました。これらの人は、社会面などでも関連記事が大きく載り、天声人語などのコラムで取り上げられることもあります。

ただし、死亡記事の扱いの大きさは、亡くなった人のニュース性はもちろんですが、その日の他のニュースとの比較でも決まってくるようです。

（鈴木伸男 全国新聞教育研究協議会顧問）